

子どもの本

研究会



35周年

子どもの本は
本の心臓

私の一冊

『昭和史1926-1945』半藤一利 (平凡社 ライブラリー)

児島 芳樹

私の母方の祖父は八代の出身だが、写真でしか知らない。昭和十九年、仕事で赴任していたフィリピンで現地召集され、翌年戦死した。享年38歳。幼い子ども3人を残したまま、遺骨も戻らなかった。

なぜ、日本は無謀な戦争に向かったのか？私が戦争について少しずつ知るようになったのは、大学生になって以降、映画や本を通してだった。中でも、『昭和史』には、戦争への道のりが人間のドラマとともに克明に描かれていて、大いに教えられた。

本書は、昭和史研究の第一人者の半藤一利さんが歴史を知らない若い世代のために語り下ろした授業がもとになっている。ときに講談や落語のように、下町出身の著者の話術は魅力的だ。たとえば、満州事変。現地に関東軍は、陸軍中央の「不拡大方針」に逆らって独断で軍を動かし、満州の中国軍に攻め込んだ。これに対し、軍と政府は事後的に追認し、首謀者たちの責任を問うことはなかった。「この人たちは本来、大元帥命令なくして戦争をはじめた重罪人で、陸軍刑法に従えば死刑のはずなんです。昭和がダメになったのは、この瞬間だというのが、私の思いであります。」

満州事変は日本の国際連盟脱退につながり、日中戦争が泥沼化する中、日本は外交の誤算を重ねた末に、絶望的な対米戦争へと突き進んでいった。

昭和史は、私たちにどんな教訓を示しているのか？半藤さんは、「国民的熱狂」の危険、対症療法的な「その場のしぎ」などを挙げた上で、「政治的指導者も軍事的指導者も、日本をリードしてきた人びとは、なんと根柢なき自己過信に陥っていたことか」と指摘する。

「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意」した日本国憲法の施行から、七十年。半藤さんの言葉は、ますます重い。「歴史は決して学ばなければ教えてくれない」。

(NHK ラジオセンターディレクター)

※8月15日(火)20:05~21:55 『太平洋戦争への道』[NHKラジオ 第1]半藤一利さん、保阪正康さん

加藤陽子さんに出演いただく予定です。